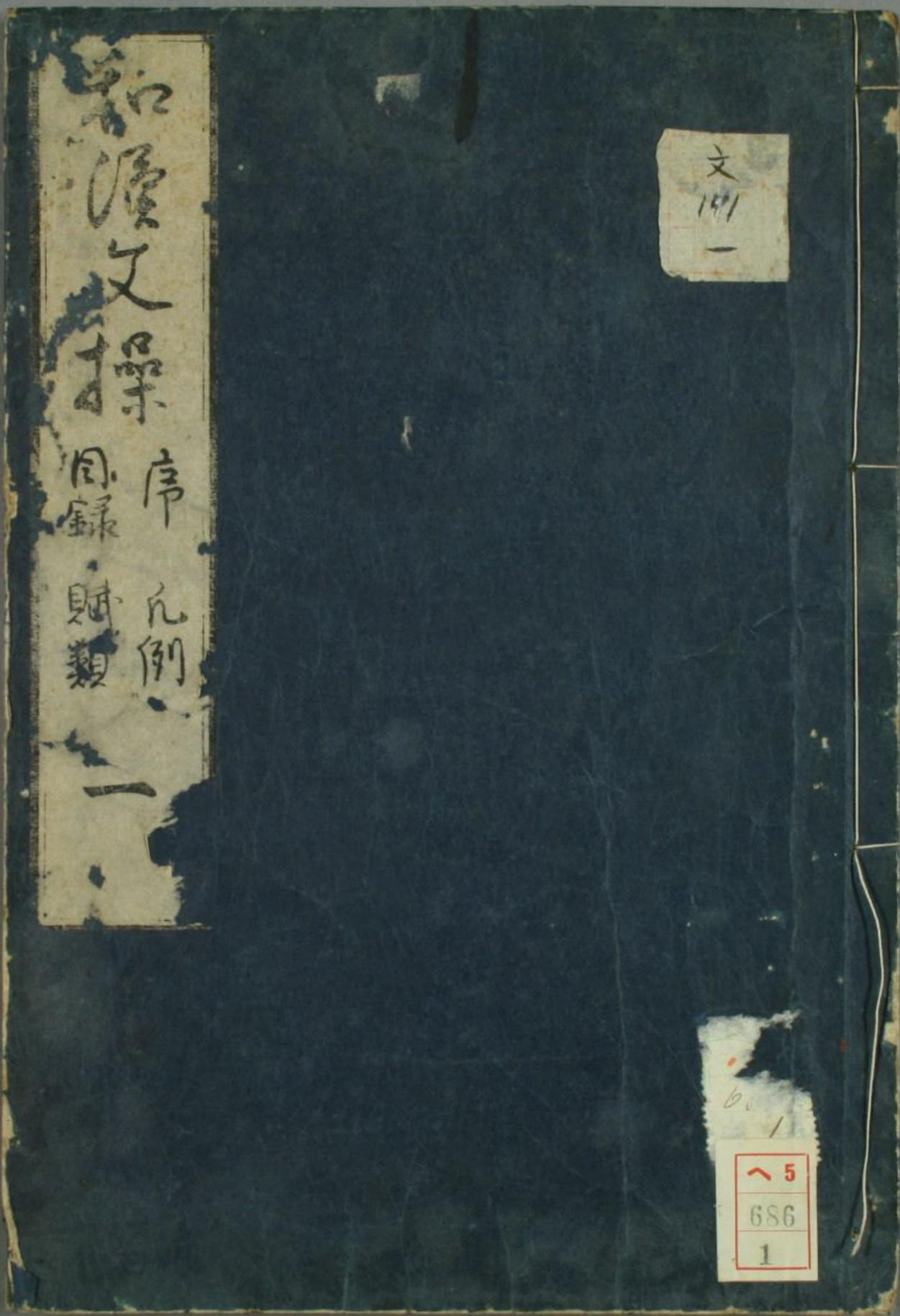
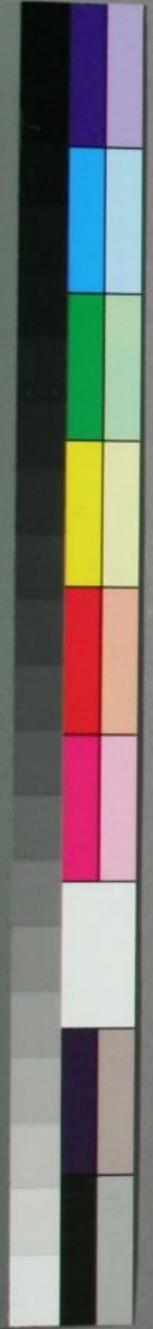


KODAK
LICENSED PRODUCT

KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

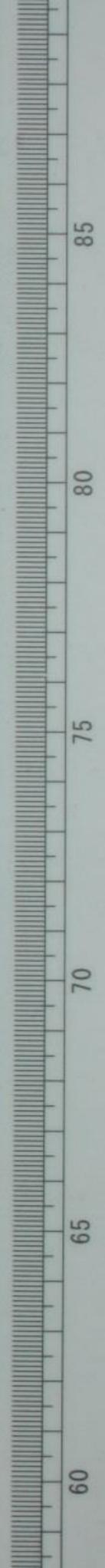


新漢文操

序
凡例
目錄
財類

文
1471
—

60
1
686
5



門
號
卷

圖書印



明治三十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

圖書印

八五
686
17

686 /



獅子菴遺稿



東家
評内
録

和漢文操

假名序

渡五仲

此はく詩音連紙の中に今此紙の流しつと
 強くも弱くも^{スウ}あらんらんらん曲^{ニカ}らんらん
 白くも黒くも^{アカ}あらんらんらんらんらん
 曲は曲のあらんらんらんらんらんらん
 と是等の言ふも詩音の梅のまゝくも能^ニ諧
 いたのあらんらんらんらんらんらんらん
 儒書し面白くの一以と流しつり併^ニり葉の微^ニ笑

大塚

二

と併へりし誹諧と俳諧の両家よこられて中右
の誹諧と連なりていふこと今世誹諧と俳諧
とをてつて次をえりし俳諧は後ちりく決まるとい
てもいふ足中の弟子ありし程を才よりて俳の
とよりて運ととよりて俳の比といふはさ
天下の誹諧師は梅の香の古くも狐子も牡丹の
蘊を短とやとてぬくと俳のこゝとをのこゝと
を多しとれりし中にも誹諧のよきとを多しと東花
と本録よりて武陵の書送稿といふは誹のこゝと
は俳の文鑑とありしはけしと和漢文操とをて

才よりて我々の古くも文とをて才よりて我々の
古くも文と作り或は和聯句といふ或は連能
互照といふもの誹諧の求韻より万葉の叶韻
といふやうに大和詞の叶韻辞といふ和漢文通
といふかありし俳の葉のなほいちり文苑英華を
俳句の耳といふこと中朝文粹を唐人の口とやわら
もいふは俳の用をきくこと今や文操のむねあり
而も同じくする時を古くもなれし耳よりす時假
よりて我々のいふことといふこと俳のおもは
意をいふことといふことといふことといふこと

田打も新書もしやうて武の月花と祇も人
も論語も孫のりありなう文子のあつらひ
むつらなすも言部も合張もるげ能信
の丹もとよみく假名も名名の二様もきつ下也
いふと文鑑も成すと路一今と文操もも意と
序も二集も我々の規操もて和漢ももらる
け時ちるる

享保癸卯三月日



和漢文操

真名序

蓮二房

和漢文操者先師之遺書而將令知真名
有和漢之通用事與也故先撰大和詞
而通五十余頁之助語訓二百廿箇之文
句然則真名之厚假名也諧楚辭文選之
言端却調源氏枕衣之出業歷見之時者
漢字也共甫之時者倭文也来昔者如軍
書操快今者如庭訓往来其外寺社之縁

起^{トテモ}建^レ度^レ讀^ニ云^フ不^レ由^ニ于^レ烟^ヲ而^レ例^ニ無^ク和^レ訓^ノ之^レ點^ヲ
 了^レ則^レ無^ク可^キ讀^ム道^リ理^ノ之^レ法^ヲ臬^ト矣^ハ是^レ以^テ大^ニ和^レ詞^ノ
 者^ノ款^文立^テ五^ノ條^ノ之^レ法^ヲ而^レ或^ハ者^ノ用^レ古^ノ今^ノ之^レ兩^ノ
 樣^ヲ居^レ或^ハ者^ノ隨^テ正^ノ誨^ノ之^レ故^ニ實^ニ歷^レ假^レ令^ニ雖^レ一^ノ字^ノ
 一^ノ點^ノ不^レ容^レ和^レ訓^ノ之^レ私^ヲ為^レ也^{ナリ}近^頃有^リ我^朝之^レ
 學^者達^チ而^レ助^テ字^考之^レ用^レ字^格之^レ殊^ニ如^キ款^文
 全^跡者^博知^漢土^之書^物而^レ隨^テ其^書而^レ盡^レ
 其^事共^信此^文而^レ不^レ設^レ彼^理則^レ乍^有字^意
 之^レ運^全無^ク和^レ訓^ノ之^レ便^ヲ要^左則^レ一^一附^レ假^名
 而^レ謂^者某^字于^某意^則奚^乎可^キ讀^ム無^ク魚^之
 之

文^耶譬^則如^此乎^之詞^和訓^左乎^共思^之
 共^而不^レ立^ニ我^國之^レ用^レ樣^乎者^漢字^者有^何
 益^要耶^爾有^則從^我朝^之神^書帝^詔云^院
 宣^云如^文官^之促^國法^如武^士之^レ傳^家訓^ヲ
 公^儀之^レ制^札者^增而^レ不^レ言^佛家^之訓^誦麼^ノ
 神^社之^レ願^狀麼^字之^レ而^レ擴^之則^レ何^歟者^增
 之^レ不^レ明^要有^媚度^雁魚^之唐^樣者^言則^謂
 我^朝之^レ耻^矣故^ニ從^實永^之御^代試^製平^假
 假^名之^レ詩^而今^也為^交真^名詩^于假^名詞^ノ
 用^假名^詩于^真名^韻平^蹤夫^以我^朝之^レ詩

歌^ラ足^レ欺^ク諸^ノ越^ノ人^ト也^{ナリ}矣^{ナリ}况^ヤ如^キ清^ノ輔^ノ之^ノ奥^ノ儀^ノ抄^ノ
和^ノ歌^ノ有^ル求^ル韻^ノ之^ノ沙^ハ汰^ハ則^チ我^ノ家^ノ亦^モ有^ル求^ル韻^ノ
之^ノ俳^ノ諧^ノ其^ノ外^ニ聚^メ日^ノ本^ノ之^ノ俗^ノ話^ヲ而^シ凡^レ里^ノ巷^ノ之^ノ
諺^ヲ雅^ノ朝^ノ廷^ノ之^ノ歌^ヲ了^シ共^ニ不^レ嘗^ラ違^ハ詩^ノ經^ノ之^ノ六^ノ義^ヲ
者^ハ誠^ニ謂^ハ和^ノ漢^ノ之^ノ文^ノ操^ト者^ハ矣^{ナリ}所^レ仰^ク者^ハ敷^ノ嶋^ノ之^ノ
流^ノ不^レ断^ハ永^ク傳^テ千^ノ阜^ノ之^ノ跡^ヲ而^シ不^レ霞^ニ之^ノ神^ノ之^ノ冥^ノ
慮^ヲ矣^{ナリ}止^シ維^テ時^ノ享^レ保^テ矣^{ナリ}卯^ノ之^ノ秋^ノ蓮^ニ等^ニ續^キ師^ト
之^ノ遺^レ命^ヲ而^シ叙^ス黃^ノ山^ノ之^ノ文^ノ星^ノ觀^ノ者^ハ也^{ナリ}



和漢文操

凡例

和漢文法ニ句讀ノ點ヲ附ル事ハ本朝文鑑ニ論アレレ
讀ヲ先ニシ句ヲ後ニスルハ漢家ノ故實ニ隨テ讀ハ常
ニ点シ句ハ中ニ点スル者ハ倭文ノ新式ニ據テキヤ季細ハ
之^ノ白^ノ月^ノ賦^ト目^ノ見^ノ賦^ニ和^ノ漢^ノ式^ノ兩^ノ様^{アリ}乎^{ナリ}乎^{ナリ}學^ノ人^ハ二^ノ端^ノ
ノ^ノ點^式ヲ考^テ何^レニ後^ニ點^ル乎^{ナリ}乎^{ナリ}
大和ノ直^ノ名^ノ文^ハ漢^ノ文^{ヨリ}モ手^ノ余^ノ波^ノ多^クハ或^ハ連^ノ續^ノ
語^ヲモ合^テ乎^{ナリ}句^ト讀^トノ字^ノ數^ヲ合^ス故^ニ漢^ノ文^ノ字^兩

ト違えし所モ有レ去ルハ漢康カ日東曲ニ云ル嘸^ハ嘸^ハ直^ニ嘸^トト云ク故^ク字^ヲカ^レカ^ニト訓スル^ハ詔路長短ハ各別ニシテ字^ハ配^ハ日本ノ国曲ト云キスレ

一 文和ノ直名文ニ漢書ノ助字ヲ用^ルニ言詔ト文句トノ差別アリテ大和詞ニ五條ノ法ヲ出セリ此故ニ文賦ニ新製ノ助訓ヲ知セント言詔ハ右ニ点シ文句ハ左ニ点ス一部ノ助字ハ其賦ニ知レ然レ古来ヨリ用習^ル之半者也ノ如キ于^テ於^テ而^レ則^ノ如^キ一字ノ訓美ハ助辭ノ常トス^ルニ圖^ル点^ヲ加^ルニ及^ス去^レ氏^細ニ和訓ヲ論セハ詞内ノ句^{アリ}向^内ノ詞^{アリ}テ文句ニ從^ハ向^点ヲ加^ハ

言詔^遠不^詔点^ヲ加^フ讀^時ハ其^増ヲ考^ヘキナリ
此^文擇^ニ八^只ノ新^製アリ其^一ハ直^名ノ和^文ニ入^ル且^ハ二
ハ直^名ノ和^詩ナリ去^レ實^承ノ幸^郊ニ新^ニ大^和詞
ヲ撰^テ漢^書ノ助^辭ヲ傳^詔成^セニ五^條法^{アリ}テ一字^私
ヲ容^レス言^詔ト文^句ノ兩^様ハ美^ノ詠^文ニ據^ルナリ且^ハ二
ハ假^名詩^ニカ^草蘇^ノ韻^ヲ用^ク其^四ハカ^草韻^ニ效^テ
熟^詔ニテ二字^韻ヲ用^フニ以^トモ漢^家ノ韻^法ナリ且^ハ五
ハ連^歌ト俳^諧ト漢^和ノ如^ク交^會シテ風^雅ノ四^録ヲ結^ン
トナリ其^六ハ和^歌ノ家^モ求^韻ノ沙^汰アル^増テ俳^諧
聯^句ニ似^テ韻^ヲ求^ルニ須^便アル^ト換^韻ノ法^ヲ制^スル^ニ

短歌行ハ四六二十四句ニ分チ長歌行ハ六八四十八句ニ
 分ツ何モ二折ノ表裏ニシテ畢竟ハ換韻ノ埒ト知レシ
 歌仙行ハ例ノ釈スニ及ハス其七八大和聯句ナリ此格ハ羅山
 ノ七字城ニ似テ既ニ例ト云キニ彼ハ字門ノ古法ヲ對シ此ハ
 字外ノ新趣ヲ對ス其例ハ詩文ノ意對ニ效テ氣取ニ生
 植ヲ對スル類ナリ此等ヲ温故知新トヤ云シ其ハ八聯類
 シ以テ標題ト成セル者ハ但シ和漢ノ文佳キニ遺スルヲ拾ト云
 キヤ此外詩歌モ文章モ時滲ル新制ハ指ラ倒スニ
 暇アラス然レハ前撰ノ文鑑ニ假名詩ヲ制スレ引類ヲ改メ
 或ハ辨類ニ和漢ノ論モ後撰ノ文採ニ八品ノ新制ニ

總テ祖父公羽ノ遺訓トカウ論ス六滅後ノ筆工ニシテ
 獅子菴ニ例ノ遺稿ヲ預リテ百廿ノ師道ヲ失ハス多
 ニ俳諧ノ中興ト云キナリ

毎篇ノ註曰ハ故事ハ此黒角ヲ加ヘ古語ハ此白角ヲ
 加ヘ古詩ハ此黒園ヲ加ヘ古歌ハ此白園ヲ加フ但シ漢歌
 ハ詩ニ準スレシ此鍵點ノ下ハ愚按ヲ以テ多ハ章句ノ儻ヲ
 註シテ文ノ斷續ト起結トヲ知シム其中ニ文法ト句格ト稱ス
 時ハ黒園ヲ加テ絶妙ノ二字ヲ用ニ絶妙好辭ハ曹娥碑ニ
 銘シテ文章ノ讚詞ナリ

ヲ記ス然レテ註ト評ト合セテ毎章ノ起結ヲ考ヘ毎章ハ
法格ヲ知レ時ハ和漢ノ通用ハ自然ト知ケン但シ註解ニ及ル
評詞ニ兼用ノ所モ有レシ

一 此文集ニ註者多傳望司ト云テ評者ヲ厚有仙ト云テ
何モ獅子ノ親中ト見レト前後ノ撰集ニ此名ヲ聞
カス然レテ二人ハ富各ニシテ選場ニ自稱ヲ憚ル古法ノ
辭宜ト知キヤ有無ハ巻軸ノ糸文ヲ見テ儒仙ノ
一乃巻ヲモ知キ更ナリ

和漢文探目録

○巻之一

賦類

- 之日月賦
- 月花賦
- 月見賦
- 雪見賦
- 文賦
- 笠賦
- 豆腐賦
- 有磯賦
- 幻住庵賦

○巻之二

詩類

附序

芭蕉翁_{ハハ}畫像_{ゾウゾウ}贊

詠_{カク}懸心_{カク}松_{マツ}薺_{カイ}

謝_{カク}贈_{カク}菊_{キク}紙_シ人_{ヒト}

贊_{カク}雪中_{カク}仰_{カク}戲_{カク}俄_{カク}道_{カク}心_{カク}詞_{カク}

右五首_{ミナモト}有_{ハス}東_{カク}華_{カク}坊_{カク}作_{カク}而_{カク}燈_{カク}老_{カク}詩_{カク}最_{カク}之_{カク}再_{カク}撰_{カク}也_{カク}

真名詩類 雜題

和_{カク}栗_{カク}山_{カク}氏_{カク}詩_{カク}

戲_{カク}影_{カク}法師_{カク}

蒲_{カク}菖_{カク}吸_{カク}琴_{カク}具_{カク}

贊_{カク}秋_{カク}風_{カク}像_{カク}謝_{カク}初_{カク}茄_{カク}子_{カク}

用_{カク}萬_{カク}葉_{カク}韻_{カク}詩_{カク}

田_{カク}家_{カク}意_{カク}

祝_{カク}竹_{カク}餅_{カク}

甲_{カク}辰_{カク}歲_{カク}旦_{カク}詩_{カク}筆_{カク}

怨_{カク}七_{カク}夕_{カク}意_{カク}

喜_{カク}七_{カク}夕_{カク}晴_{カク}

老_{カク}團_{カク}詞_{カク}

假名詩類 雜題

兼_{カク}好_{カク}賢_{カク}柳_{カク}後_{カク}園_{カク}畫_{カク}寢_{カク}

詠_{カク}梅_{カク}擬_{カク}古_{カク}筆_{カク}

對_{カク}花_{カク}感_{カク}老_{カク}民_{カク}詞_{カク}掌_{カク}

松_{カク}膏_{カク}狩_{カク}戲_{カク}花_{カク}笠_{カク}鏡_{カク}岩_{カク}詠_{カク}四_{カク}季_{カク}

詠_{カク}蓮_{カク}梅_{カク}嫌_{カク}悼_{カク}水_{カク}國_{カク}公_{カク}晚_{カク}望_{カク}

愛_{カク}牡_{カク}丹_{カク}

憐_{カク}小_{カク}傾_{カク}城_{カク}

師_{カク}走_{カク}朝_{カク}元_{カク}履_{カク}

松讚 薊花 業平益贊 待石意

寄餅意 挑灯吟 四季詠

去者月踈 年賀 樽舟遊覽

遊女泣老 恨別 呵猫首尾吟

兩月愛蝸牛 野馬贊 寄團扇意

謝鮭塩引詩 再和鮭詩

歌類

壽老人贊 小鍋歌 題不知

白髮吟 扇歌 辭世詞

佛奉菊歌 挽歌 比丘尼曲

七夕姬和讚 讀法花經 讀法茶歌

練漚歌

辭類

聖人無憂辭 刀虫辭

感齒落辭

○卷之三

行類

連俳歌仙行 求韻短歌行

求韻歌仙行 雙六行 聯句行

聯類

大小聯

鑑亭聯

園口聯

五字聯

堪忍聯

序類

奉珂億上人歌序

文臺繪序 而物語序

道遙遊序

愛石合序

○卷之四

養表類

剃髮文

通夜物語表

教令類

序山公九錫文 蒼巖再公九錫文

范制札 極樂寺啟

書快類

年始快 遣庄五郎書 配取這快

遺書 專符文 申石谷十歲快

招隱文 答五老并書

○卷之五

贊類

四季扇贊

花生贊

頌類

枚子頌

辨類

之上辨

依志松辨

說類

木履說

搔歸說

團扇贊

之頌圖贊

醋貝頌

急管辨

東桐辨

福神贊

鷲贊

大根頌

東桐辨

白杵說

眠五說

○卷之六

論類

德和論

莫弱論

解類

長于解

箴類

摺小木箴

生海鼠箴

圃論

不掃地論

昼而後解

葭若箴

猿箴

記類

紙衾記
壺中園記

何尾亭記
琴之菴記

二方樓記

○卷之七

銘類

鏗塔銘
本箱銘
洪筴銘

瓢銘
炭取瓢銘
鬚鏡銘

姐板銘
蠅打銘

傳類

竹夫人傳

瓦器傳

築然傳

讀隱逸傳

帚傳

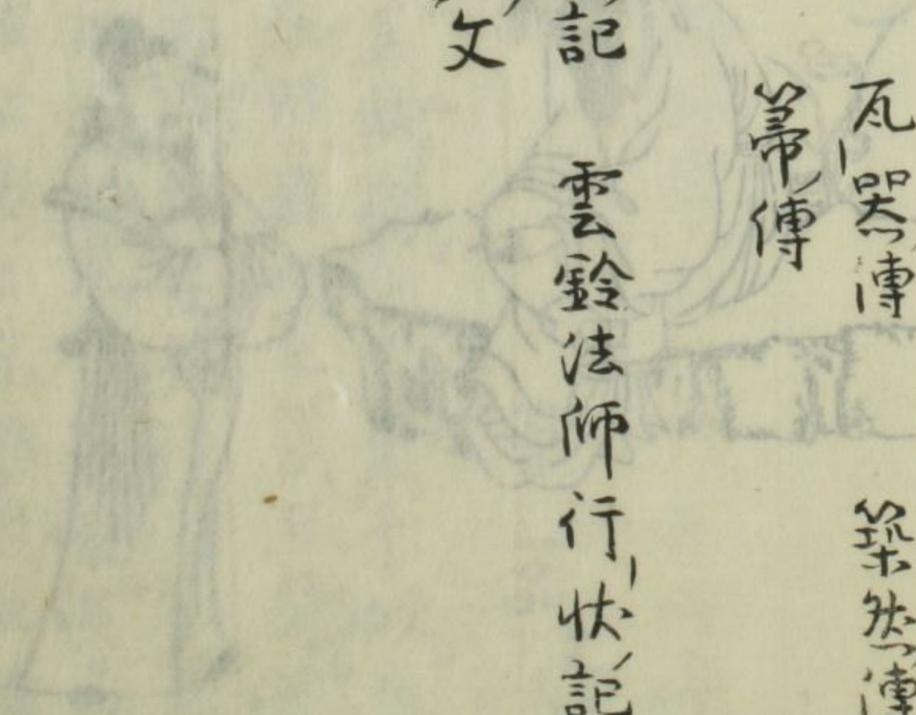
吊祭類

浪化公終栗記

雲鈴法師行狀記

祭之界万靈文

文操序同終



琴瑟圖



和漢文操卷之一

賦類

三日月賦

管之品 文時

瞻彼新月。有微其狀。攬之不及。無手。皎々之光。未舒。仰之則在。眸。纖々之質。可望。若乃風吟中秋。月沉西海。伴星榆。佇影。因茲而見。隨曆英。孤姿於是。半在。觀其。以陰。互位。成象於天。彼合璧之有始。諒推輪于

和漢文操卷之一

向前。德也。不孤。暗知。珠珀之未寶。物也。有
 漸。豫駿。金魄。於特。圓。及夫。影倒。秋江之浦。
 光。傾。暮山之巔。遊魚。疑沉。鉤於碧浪。旅雁
 驚。虛弓於紫烟。矧夫。高秋。易感。良夜。未眠。
 窺仙。城之客。輝。尚。秋。綽約。訝。靜女之眉態。
 空。迷。蟬蛸。士。有一。出。董帷之內。再拜。塵榻
 之西。慮。就盈之所。其。慎。終。如始。悟。忌。滿之
 可。法。見。買。思。齊。插。怪。樊。挂。枝。於。暮。秋。獨。自。違
 違。而。悽。悽。合齊約

吟對文林卷一

○評云賦者在。本朝文粹。而為題。纖月賦。共
 今。有。和。二。日。月。之。字。而。所。成。此。文。採。之
 卷頭。官家。者。我朝。之。博。士。而。為。文。章。之。家。之
 祖。則。也。是。以。評。此。文。則。文。字。者。亦。諸。越。之
 姿。共。文。辭。者。運。大。和。之。情。而。多。用。之。日。月
 之。和。訓。了。共。叛。作者。之。本。懷。間。敷。哉。誠。可
 恐。者。此。賦。之。評。也。乎。此。故。不。註。文。中。之。故
 事。古。語。例。特。後。君。之。沙。汰。與。也。但。謂。此
 賦。之。增。則。以。望。在天。西。易。漢。解。先。齊。之。四
 韻。歷。在。有。者。除。六。所。之。發。語。而。以。之。十。八
 句。成。十。九。章。以。二。百。十。二。字。成。一。篇。止。矣
 然。則。可。以。自。角。知。韻。礎。以。黑。圈。知。發。語。也

全篇論者謂四六之文法一全乎

接スレニ文章ニ句讀ノ有ルニ文體ノ序ニ細論アリテ
假名ニハ漢土ノ式ヲ居キテ句ヲ先ニシ讀ヲ後ニ句ハ
旁ニ点シ讀ハ中ニ点ス去ルハ句ニ讀ナルモ二句一讀
ナルモ二句四句ヲ合テ一章ト云ハシニ和訓ハ長短ノ違
アルハ俟ニ其論モ亦ト云ハシ然レモ後勅ニ評セハ漢文ハ
讀ヲ先ニ点シ句ヲ後ニ点ス古又ハ讀トハ誦時ノ息
續ニシテ其次ヲ誦ハ埒ノ明ク故ニ先後ヲ合セテ一句ト
云ハリ先後ハ但シ漢式シ是ト云ハシ去レモ漢ノ校書式
ニ讀点ハ中ニ打テカレヌ句点ハ旁ニ打テカレトヤ物
中ヲ隔テカレヌト云フ當然ノ理ハ明ラメ難シ然ラズ和
ノ文式ニハ讀ハ旁カニ点シ句ハ中ニ点スキヤ但シ漢文

ノ法ニ任セテ道理ナキ故實ニ隨キヤ也故ニ賦ノ点ハ東
ノ法ヲ擇リテ暫ク漢ノ校書式ニ隨フ月見賦ハ俣文
ノ新式ナク讀ハ旁カニ点シ句中ニ点ス也等ヲ和漢ノ
意地下知キナリ或ハ發語ニモ返辭ニシテ讀点ヲ
ツケケルハ例ニ俣文ノ新式ニシテ誦ム時ニ長短ノ埒
ナレハ一部ハ總テ之月見賦ト月見賦トノ句讀ヲ見テ
旁中ノ点ノ差別ヲ知キナリ

月夜賦

兼好僧於

おとけらりし月をくぬぎてささるるのこころおとけらるる
ふむらひく月をぬぎてささるるのこころおとけらるる

るるこころや幸のりらねりまきれ

○評云は脚をほれく竹ふるるまき月花の段の略文ありまきふる竹花と評さる好く好色の二段より月花の段も非の段もすして大福長者の段あり或は俗俗の名ゆとせしむ或は男女の愛をよといふありにあらく儒師と齋好し一兼好一流の建論ありとむし今のは名達へ釈迦孔子の勸懲としおあふの直ふれん十六抄の枚子と定規あんと先師のほれくの讃し評論ありおれい今月花の段も論議のすむ視觀をよしして月とてほれくと視る人を務む兼好の守りてうし一誠ほれくめき地とらやと色と勸めしむ

儼らし是とらほりし物とらしむとやせしむ荷擔して以脚と才二段しむとらせ次は下の宿名に園太曆の勸諷ありと菅家のこと品に對しむし以後の傍かと稱ふとらほりて選場の傍しふし

月見賦

芭蕉翁

こころおほき湖の月をむとらきとらく本意ありしきしききし。藤新ねやのくくと信をほし初と酒とをのまきし。泉川ふるあふとほりて。心秀の茶とほりて。信来し一おのまふとほりて。心秀の茶と

帯^ゆつゝの酒とつゝかまゆの人の^ひ流^よと^なれて。酒^きと
 灯^あか^くぬ^ふて。と^き業^ふ。玉^川の歌と流^い。玉^川と
 月^ようを^あよ^て。と^酒。業^天の^くん^ぞと^ひん^びと^いふ^ふ。と^よ
 つ^ふく。本^神とを^きん^しよ。と^月と^あの^から^はら^あよ。
 かつ^まの^あま^れた^あま^はい^あも^も。と^れら^中り^も世^然は^神。
 酒^うか^らも^もと^業に^感。お^もい^もし^もと^いふ^ふ。
 以^ゆて。後^に。と^子の^志と^をち^らん^あ。と^こと^か
 の^なと^いふ^ふ。と^我に^得の^らと^まれ^た。と^いふ^ふ。
 飲^中八^のあ^まい^あん。酒^やは^れく^のは^きん^く。
 と^はく^ろり^あな^えん^ひん^が。と^月の^体と^うも^と。

とい^かし^れま^の後^に浮^世の^のの^のね^とは^くし^り
 末^くね^なと^いふ^の月^の名^を

か^くく^らと^をの^魚と^あり^て湖^のの^月と^はつ^と
 お^のむ^人の^風と^はん^くら^に。松^上丸^の平^の座^にも^た
 あり^たり^も。と^的と^業の^つの^男あ^れん。昔^々の^船と^は
 と^何と^いふ^とあ^いと^ちら^いに^はも^や。お^のの^屋の^名
 ある。鏡^の山^にあ^まい^らん^い。と^後と^横川^の
 松^はあり^て。と^月の^名と^いふ^ふ。と^いふ^ふ。
 う^しら^のよ^きの^名と^いふ^ふ。と^いふ^ふ。

の風もくらく。北こよ。楓橋の舟もまきあつん。矢橋の
帰帆と。とる舟と。りてあそむ。ゆるる舟一

名月や湖のうしろの七山町

はね。我が舟の葉式部ら。石山は湖舟のおやうけを
あす。唐園の。藤居士と。西湖も越すのよきゆい
とそとてよ。いつねも風雅のうらよのそらうて。今めや海舟
と浮さんや。さあせも和漢の名跡ありきし。はて
本宿に船とゆい。まき。葉居の橋下よんこをよ
い。月らう。蓮葉のれとる。さそく。さかき。まき
三

のまもつたあよ。竹の林の海は時あつて。松の川の騒々
らういらつとや。行そくか。ゆく月わたらふと。岸邊
のまもつたあよ。まき。葉居の橋下よんこをよ
尾花川のめいあつと。さそく。さかき。まき。まき
あな。おとと。まき。葉居の橋下よんこをよ。

之井さよ北河さうらやらの月

津よ。折敷のむう。あつ。舟よ。さよらの遊とたのしみ。
け。た。韓愈う。まき。葉居の橋下よんこをよ。まき。葉居の橋
下よ。さよらの遊とたのしみ。まき。葉居の橋下よんこをよ。

ノ詩ニ據レリトシ△蘓東坡赤壁賦ニ有客無酒有酒
 漁者或曰罾網得魚快如松江之鱸或曰我有斗酒
 待不時之需云云梅スニ賦ニ八則後赤壁ヲ取合セテ
 多ハ古語ノ裁入リ以下ノ相紋ハ多ニ見ルシ○躬恒等
 多ク中ニ入レテわたりて此等ノ人ナリ秋ノ夜
 の月●ニ賦詩楓橋夜泊ニ月落鳥啼霜滿天ニ梅スル
 ニ鏡山以下ニ多ク湖上ノ八景ヲ吟スルニ屏帆ハ今宵ヲ銀食
 ニ似タリトハ世等ヲ結前ノ絶妙ト称スレ▲七中町ノ古又ハ諸抄
 ニ此名アリテ細琴ヲ及ハス七中町ノ一生ノ盛衰ヲ云テ梅スルニ
 此後句ハ東坡ヲ西湖ノ詩情ヲ含ミ源氏供養ノ風情ヲ寄
 セテ月ノ艶色ヲ形容セル餘字ハ鎖詞ノ絶妙ト称スレ
 ▲竹系式部ハ源氏ノ趣向ヲ祈ルテ石山ニ冬ニ毫シテ六十

恒ノ面影ヲ写セリトシ●蘓居士ト東坡ナリ西湖詩若
 把西湖比西施淡粧濃抹兩相宜梅スニ世一對ハ式部
 ニ居士ノ官名ト云イ源氏ニ越女ノ字ヲ及ト云イ世等
 ヲ俳諧ノ筆格ニシテ和漢ニ意對ノ絶妙ト称スレ
 ▲神仙傳ニ蓬萊之地隔弱水不堪泛羽毛▲漢武故宮又
 蘇詩ニ芙蓉堂ヲ詠露ニ仙術ヲ云テ古又ナリ▲竹林ハ七松
 ノ高ヨリ細琴ニ及ハス梅スルニ竹ノ林トハ酒ニ竹葉ノ響
 ヲリヨリ亮ハ酒ノ枕詞トモ云ハン増テ世對ノ短筒ナカラ赤壁
 ノ兩語ヲ裁入テ文ニ錯綜ノ絶妙ト称スレ○あり等ノ
 多ク中ニ入レテわたりて此等ノ人ナリ秋ノ夜
 ●詩格ニ唐實鳩騎駢得句ヲ身夜他中樹僧鼓月下門
 推鼓未定引手作推鼓執カ一時衝至韓愈行隊鳴

見道所得愈日敲字佳並書歸為布衣文云
 ○評云此脚と云祿の始なり湖南の幻住庵の山は時祖
 と云所し文章の浮論ありて假名と真名の通用より
 能儀のさしの筆格と違へきと百練千鍛の斧とがて
 祖を月脚と四六の法とやうげと所と文脚と五條
 の式と併しありと百世の家訓ありて下下の能あり入
 むとありて柳子庵の遺稿と十龍とありあり
 中野文鑑と支とていふと一と手抄の老人の硯脚と
 敵と所と種とありありとて既王賦の述云あり
 此と對とをたれと選場の心なりと百世と文鑑の
 時をいふとありとての實加とありとてや文探の
 中懐とありとて真名とて著家の賦とてて假名と

ハ其好の文と對しとありと文章の博はありて大和
 真名の神とあかくなくとて凡雅の原ありて
 一入のさ地の所とありとてさうとて二と布と評と我
 家の評ありとていふありとて温奴の辞あり
 て一部の評ありとてありとて月久脚と假名の真名
 らりとありとて文脚と真名の假名ありとありとて電脚の
 履家の文對ありとて和漢と文と操とてとて標と題
 のんともとあるありとて世評とて脚の婉靡ありとて心
 談の自在ありとてとて評家の筆格ありとて文章い
 五箇の終始と感却ありとて故とて脚と句讀と我が
 の式とてとて文脚とて即語の箇ととて一部
 新製とて二とありとてありとて

雪見餅

舞子

十月北風吹れ五月の月も照らす雪をよき雪の如く
 ひろくは神と火燈のふりまき入地をよき雪の如く
 金葉のりもまらちちちと神とちちち中とちちち
 葉殿入ちちちちちとちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

雪見餅の作りかたは、雪の降る日に、厚くた
 らした餅を、おぼろ酒か、ちちちちちちちちちちちち
 の香に十般の揚げたはき、ちちちちちちちちちちちち
 ささきんちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 と、世に国川、舟と浮るに、錦城の三奇、吹とちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 舞子のひむくし、純子の花の色、ちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 葉さき、又湖のあちちちちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

雪見餅

舞子

ぬあまいあんにらて 孫の木の香と仰ぐとや
 てららと ^{スガ} せくくをよみとせとせらとせらと
 互 ^{ツリ} 梳のふありて 知とあせむるあくつけるあふ
 と舳 ^{ツノ} へよきて おもとやうのあをわさるのたかられ
 月 ^{ツキ} 忽との入およけふとあむとら也

○註曰此詞鉢木ノ謡ヲ母ニ在ル人ヲ羨ム様也 ●香姑山峯雪
 白居易カ詩 清女納言カ枕巾帯ニ漏ラ捲タル飾アリ
 ▲晋子歎居山陰雪夜乘小船而訪載遠造行玉前
 返曰乘魚而來魚尽而歸 ●錦城ハ放公羽カ詩ニアリ蜀
 成都ニ歌舞ノ地也 ▲まことの園ハ奥州在リ 莫来ハ名社ノ

假訓リ ▲越史ニ范蠡滅吳後取西施遊五湖不返云 ●杜律
 越女紅裙濕 越姬翠黛愁 按此詩ハ妓女ト舳遊ノ凡情
 上云ノ雪見舟ニ結ル也 經國下ニ四野ハ國川ノ各野ナリ
 ○浮云此賦ハ例の沈沈ト月見父兄の對ト也 一ハ此に
 月賦の婉靡ちりるに雪賦の虚説ちり文採はけニ雪柳
 沈沈の虚説とされとあん採りるに賦舳ハ瀏亮とい
 婉靡といひあはくると文句と對トへされと浮も采玉
 好色賦のこまき文とる体ハ格ありてこれノ二辨と
 ちりるむと月雪の二賦とあるとる也 例ノ文採此
 夜更らるへ月賦と文賦とい假各有は各の通用とまると
 け賦ハ賦中の婉曲ちりとまると鑑乙子と先師の採り
 乙と此の角の采取とけらるへ此賦の文華と採れらるん

文賦

東蒼坊

天地開初而後，万物自有聲而從，其聲之
 分音，其音之調韻，身歎者啼，而知哀樂，
 草木者鳴，而見榮枯，
 增而人間之委敷，
 其言，橋懸不及雲，而汲野中之水，心則通
 男女之情，
 和發神佛之心，
 言雨有而
 社言葉者不斷，
 綴而只文，
 曰章也，
 了春鳥
 之轉，
 雨苦不乾，
 則梅之花，
 豈寄歌人之詞，
 兮秋虫之鳴，
 幾利彼多，
 則紅葉之錦，
 盡織

姬之手，
 兮皆只聞其物之其色，
 而人之
 筆被文成也，
 臬柳謂文章之要者，
 物有姿
 情之二而情者一樣，
 古今也，
 共姿者，
 万別
 日夜也，
 則興詩兮和歌兮，
 初成連飾之四
 而詠芳野之花於白雲兮，
 喻更科之月於
 團扇兮，
 總而不言端之文，
 欵者，
 左有則月
 花之情，
 述有孰所可求情，
 季月者，
 惜山端
 之傾月兮，
 花者，
 歎木間之散花兮，
 惜姿者
 万別也，
 共歎情者一樣也，
 也，
 爾有則學文
 章人，
 麼改次兮，
 今古了共不溫情之新故

了哉。今將見。淫。棧。之。文。賦。了。則。為。其。體。也。
屢。遷。為。其。意。也。可。巧。與。者。我。副。乍。謂。文。體。
之。變。思。違。詞。之。巧。而。所。謂。意。之。巧。亦。哉。但。
者。從。博。字。之。惑。失。恒。心。而。不。知。次。女。之。為。變。
化。花。鳥。了。共。情。之。為。不。易。月。雪。手。麼。次。女。者。
似。山。而。條。易。春。秋。了。情。者。如。水。而。不。言。畫。
夜。了。尤。許。有。和。漢。之。違。則。今。者。論。次。女。情。之。
先。後。而。新。可。建。俳。諧。之。筆。格。與。也。尤。在。則。
謂。詞。之。巧。者。春。者。楊。柳。之。假。風。而。添。空。于。
雲。雀。之。氣。色。了。夏。者。葛。蒲。之。濺。雨。而。待。風。

于。郭。公。之。初。音。了。厚。帝。于。菊。秋。之。夕。音。了。
雪。降。于。松。冬。之。曙。明。了。添。四。季。折。々。之。文。
而。令。遊。蛙。於。硯。冰。了。為。鳴。掌。於。筆。林。了。詞。
者。為。濱。之。真。砂。厚。哉。斯。者。天。地。之。誨。人。而。
使。人。鳴。之。了。則。其。声。分。儒。佛。之。文。而。五。絃。
之。琴。亦。者。解。庶。民。之。愠。了。六。時。之。鐘。亦。者。
覺。衆。生。之。眠。了。迦。葉。之。舞。麼。子。游。之。歌。麼。
增。而。我。朝。之。神。樂。亦。者。乍。雞。天。扉。之。明。人。
面。之。白。鳥。則。竹。木。麼。靡。而。無。音。于。凡。了。鶴。
龜。麼。舞。而。有。色。于。雲。了。皆。是。為。家。之。秘。

曲則遠者以斯文調四民些近者以斯文
和五倫秉天不喪斯文在者詩歌者增而
連佛之人麼道知文章之有天理了哉抑
謂詩歌之用者令物言非情之草木而字
出其物之姿則身麼分和漢之文而諸越
之詩亦者啼提胡蘆兮大和之歌亦者轉
翻摺了兮櫻之與雪散日亦麼拍之兼雨
降夜止麼神鳴于雲兮木枯于風兮實夫
菝菝之有聲麼人之音信而厚文兮爾又
蝶鳥之無心麼筆之物言則成章兮孰若

觸其時之折則何歎者不哀其詩歌者所
知文章之老也其詩也有杜陵兮李白則
其歌也有定家兮家隆而今者成連佛之
了則連歌者令含寫玉之凡情兮俳諧
者所寫素顏之凡姿兮花程有家々之意
地共論則姿情之先後而已也其外者
稍流系竹之又而之線之噪亦者令後於
佛仁乎兮尺八之哀亦者使注於鬼靡毛
兮夫尚不言韻之文歎者况隔玉之翠簾
而通馳心於琴音栗者色好人之文憎也

則泣麼笑麼心之隅而總而不文章之哀
怨乎耶然共深硯于筆而左乎謂文章時
者我家製五條之法而一篇之趣向者不
及言才一有言語之虛實才二有文句之
起結才之有句讀之長短乍左有此之者
文章家之通法而和漢有齊痕了則今更
不及斷其訣止才四有假名真名之配者
譬則如謂掌嚮梅真名者返而有語之間
共假名者直地讀下而將為書續掌梅者
字面之配麼不大和掌者梅共掌之梅共

多加與用之手亦遠波而助語亦者知有
無用之用了哉才五有俳諧之筆格者譬
則將謂人之奸醜也所謂莊子之厲與施
奸醜者連歌之文法而厲施者俳諧之筆
格也斯構文章之家而為宗旨言語之次者
情無新古之詮美了則將殊儒佛之教誠
為也假令以和歌連奇之函玄同出於蒼
兮浦山於鳥兮憐霞兮悲露兮一首動天
地共不所聞乎平之截之耳矣則有難立
町人百姓之用乎雅言麼俗語麼為人

日用厚哉。率哉。謂俳諧之法。乃者。史記有
 談笑之贊。而自在言語之虛實也。則乍月
 入兮。乍鼻出兮。歷於極來。武士之心兮。悅
 于鼻。敷木樵之耳兮。諫君宥父。命麼其詞
 之不。比干兮。其行之不。伯夷兮。乍遊酒色
 之中。遜言而撓其人。了則更不及。儒佛之
 太。後從和歌麼。徒連歌麼。風雅者。以俳諧
 之文章。可寫於花鳥之情。了則可達於情
 塩之用矣。夫今也。稱白馬之文章。訓則引
 古草紙之美。人揃而所書。繁式部。小式部

鬼之娘。之十郎。娘。小野。小町。之若盛。者二
 對。變言語之虛實。居四句調文句之長短。
 歷斯所學。文章人者。四等。同十年之眼。而
 可見。千糸一斬之功。與所諾。那評。此文之
 巧。則起何條。無事短對。而和鬼神之娘。於
 十郎之名。却斷百歲之姥。於若盛之詞。了
 才一之虛實。者例之不言。每篇之法格。麼
 在茲。則每章之起結。麼在茲。而凡雅之淋
 敷。見麼俳諧之面。通去麼。皆々不在茲。要
 耶。然則以故翁之一言。百世成文章之鑑。

又變化スル似テ下流テスノ水也故ニ情ノ不変ニ喩フ然レニ
 唇舌ノ音語ヲ假テ春秋ノ和訓ニ對シタル和漢ニ意對ノ
 絶妙ト稱スシ ○伊勢物語「つらき」柔のむはくちあは
 しとよの海をいそぎしうしは漢 △古今集むらさき
 水もさむむのふとさげのきくふりものつれさうと
 下中しらさる△歌詞書言はよと漢のまゆしやとて
 ちさりの端さしそなへたり △韓文維天之故時
 也亦然其其善鳴者而假之鳴梅梅スレニ此二句ハ其
 文勢ヲ假ルニヤ ●哀詔舞彈五絃之琴採採南風詩口
 南風之董兮兮可以解吾民之愠兮△仙經神園精舍
 ノ無常院ニ六時ノ鐘ヲ鳴シテ比丘ノ眠ヲ驚スト云一
 ▲大論乾達婆王奏樂四葉同舞舞起舞トトアリ▲史記

同ト武城ノ宰ト為テ百姓ニ教テ絃歌セラレ孔子ノ笑ヒ玉
 ル有アリ▲神樂ニ面白ノ夏ハ日本紀ニ在リ奉ルニ及ハス論語
 天之未喪斯斯文也匡人其如子何 ●山谷常詔詩註
 脛却布袴ト啼息アリ提胡蘆沽美酒ト啼息アリ何レモ
 詩人ノ寄言ナリ然レニ大和ノ俗談ニ鞠措了スホフホト啼息
 アリ鳩鳩トモ木巻トモ云リ明日ノ日和ヲ定ル声トス詩歌ハ
 又ノ飾ナリ△ほれく竹四季結段折つつれん何れありれ
 ちさきんとあり △我家五條トハ芭蕉云羽白馬經
 文章訓ト云ク教誡訓ト云ル兩訓ノ差別アリテ道ニ文教ノ
 二法ナリ其中ニ二言備ノ趣向ハ儒仏を在ノ經書ヨリ詩歌
 連飾ノ文章トモ趣向ニ執中ノ法アリテ一部ノ始ト終トヲ
 調フ委曲ハ其註ニ見ルレ但シ才四才五ノ評ハ此賦ニ先師

ノ叙文ナリ ▲莊子ニ奉^レ廷^ト與^ト極^ト厲^ト與^ト西^ト施^ト一^ト道^ト通

為^レ一^ト希^ト逸^ト註^ニ廷^ト極^トハ^レ撰^ト直^トナリ厲^ト施^トハ^レ美^ト惡^トナリ或^レ曰

厲^トハ^レ癩^トナリ凡^レ ▲古今序^ニかくてをむとをいふと

露^トとあられし者^トとかみしものなり天地ノ詞^ト前^ト三^ト山^ト接^ト

ルニ花^ト鳥^トノ對^ト八^ト目^ト出^ト三^ト浦^ト山^トノニ字^トヲ對^トセル六^ト箇^ト敷^ト凡^ト浦^ト山^ト敷^ト

凡^ト此^ト類^トハ和^ト訓^トノ常^トヲ故^ト實^トノ法^トニ隨^トフト云^レル大^ト和^ト詞^ト一^ト條

ナリ然^レルヲ賦^トハ二^トいふノ通^ト詔^トヲ以^テ此^ト等^トヲ筆^ト占^トノ絶^ト妙^ト

稱^トス但^シ但^シ文章^トノ筆^ト占^トハ^レ漢^ト三^ト筆^ト端^ト鼓^ト舞^トト云^レハリ

▲史記^ニ俳^ト諧^ト贊^ト天^ト道^ト恢^ト々^ト豈^ト不^ト大^ト哉^ト談^ト言^ト微^ト中^ト亦^ト

可^レ以^テ解^ト紛^ト云^レ或^レ曰^ク笑^ト言^ト合^ト大^ト道^トトモ或^レ曰^ク以^テ談^ト笑^ト詔^ト

諫^トトモ評^ト林^ト三^ト總^トテ言^ト詔^トノ自^ト在^トヲ稱^トセリ武^ト士^トハ前^トニ

▲史記^ニ比^ト干^ト諫^ト于^レ忠^ト死^ト伯^ト夷^トハ道^トテ餓^ト死^トス其^ト殷^ト紂^トノ賢^ト臣^ト

奉^ト及^ト之^ト▲論^ト語^ト邦^ト無^ト道^ト危^ト行^ト言^ト遊^ト ▲白^ト馬^ト文^ト章^ト訓

三^ト世^ト早^ト紙^トノ二^ト對^トヲ引^トテ其^ト訓^トノ序^ト説^トト成^トセリ去^レルハ武^ト江^トノ

芭^ト蕉^ト庵^トニテ素^ト堂^トト又^ト章^トノ後^ト詔^トナリトク ▲禪^ト録^ト語

鏡^ト見^ト一^ト向^ト十^ト知^ト眼^ト可^レ見^ト千^ト糸^ト一^ト斬^ト功^ト云^レ ▲白^ト馬^ト教^ト誡^ト訓

能^ト備^ト一^ト之^ト條^トハあり世^ト情^トハ人^ト和^トハ又^ト倫^トノ常^ト也^トナリ

何^レも一^ト之^ト條^トハあり世^ト情^トハ人^ト和^トハ又^ト倫^トノ常^ト也^トナリ

○浮^ト云^レけ^レ賦^トハ視^ト海^トの中^トより^レ様^ト義^トを^レと^レえ^レい^レの^レよ^レと^レ

大^ト和^ト直^ト各^トノ新^ト論^トあり^レか^レは^レら^レぬ又^ト賦^トの^レも^レ有^レ

あり^レり遺^ト稿^ト夜^ト話^トも^レな^レは^レあり^レる^レる^レ假^ト名^ト

有^レ各^トの通^ト用^トナリ^レ浮^ト云^レの^レ助^ト詠^ト辭^トと^レや^レり^レて

大^ト和^トの^レも^レな^レは^レり^レ自^ト在^トと^レな^レる^レを^レけ^レり^レる^レる^レる^レ

のほしあんな大和詞の新製ありて又條のんはて
 詠文さうに音書抄流のよふ遠波をばりて
 俗詠の舞乃而為舞^{ニフテ。}字のこまきも後家の
 字美といふまありて一^{ソハ}点のこまきとこれる
 ろりあれを副^{ソハ}假名ろし及かりもあれは
 賦の古騷ちるやあのおのまゐるの體觸とつあ一
 はらくけ賦の次第とるりに始とて七言
 韻の真余は文ありすとつん中比を陸接の文賦
 と敵しく教誡と指のえちりとつん文章と
 字のえちりとつるこに傳所のさ地とるりてた
 連流の建^{タテ}流とまん終と白馬とゆふのいひ
 百や文章の體とふさりて速^{イサ}而不^ス作^セの辭を

のこあんなや二對一和漢の文法をちくちり能體の
 筆格とせくちりとしあ

笠賦

岸昨暮

むしーを本よ果くひまを完ありて人しそ^ノ賦の
 けのありきりと^{ヌラキホラヒ}置帆負の神とやけけ
 けいまをばくちりあひるともまのま^ノ君とあさくあふ
 へ天の波ちあうきりーそのちり世くれおあきうあうて
 ちまの伴達さくちりねまのまあふおのむい
 まるんまふんあれた。まはりゆめとらるるあうて

○註曰▲文選序冬亮復氣▲四吉又記三手置帆負ノ神ヲシテ
 始テ三ツ造シメ玉フトアリ ○仲九考▲天の糸わりのけ
 んれいからうちりこまの山へちへんも○古今集
 みまのいふことトセみやむけのあめトあひあひ
 けり ▲東坡カ雪見圖ハ張公ヲ看テ野馬ニ騎リ多ク
 竹林ノ様ナリ▲浮世又兵衛ハ大津繪ノ元祖ナリ浮世立ニ藤
 ラ被キタルヲ其中ノ名物トセリ按スニ賦對以下ハ文ニ長短
 ラ尺ニセル中ニ近江ト加賀トニ古今ヲ對シテ躍々躍リ註ヲ
 謔フトハ傳文ニ字對ノ絶妙ト稱スシ ▲論語女子與
 小人為難養也近之則不遜遠之則怨註臣妾也
 ▲采玉賦ハ文選ニ在リ按スニ其賦ハ三ノ所決ハ魯臣好色
 ニ字ニ賦ノ一キヲ寄セテ和漢ノ證文ヲ結語セリ

○漢書曰賦之婉孌のほろり削之沈潜のまほ格とさき格設
 いき孝のつ子なり世々名のまを形意して月々も威光
 とあつらひらままと詠答の沈潜と格と一作答ハ
 前代事ハ好名なりし今世文操ハも文章なりしなりを
 中におろさあつて常にそむのあを失くす針や涯の
 こ字と顔ハ形下能得のまをまおかりとせ

豆腐賦

北七里

食し新ありてかちちと角よしてまの色の白く
 秋のおきと目れさやむう淮南王の命や位
 一あるおの中編をててけ物とめんてめい今

唐のし大和のし美羅流よりひらりてを風玉様
 といはれしをばとてまほしのちとていふか
 けふも空の勅名とかよむりて海おのるよき人
 といふも佐賀の味く連三郎とやしむるはると
 神園の境うはういふを抽のちひといひてはけ
 ころを橋の神のうらも今とあわれのおきよゆ
 舟一々言はれぬと田原は神とてあられし言
 待詔の縁ふく念佛備のお言ふく一蓮花の
 業敵よしとふくし佛家とて南禅寺あはれ
 武内とていふ言ふありて平人の治部とて名

温純しともなり服ハ益の名類ちり一はれれを
 い録名のかよかきも松のいと越後の書ちりや
 子録の鯉くアとりの利持りともいふ油揚の類
 いたるは献きりて油糖味ありは所の物ちり
 ちり一とていふ鯉とていふを我所のね談いり
 かりて油川のちりひきまらちか一はれれを
 ちりとていふはれしは聲あるといふ君子あはれし料理
 場とていふはれしとていふはれしとていふはれし
 ちりとていふはれしとていふはれしとていふはれし
 ね事のは月よとていふはれしとていふはれしと

支那巻一

七八

奴豆腐こころの物なるを時めはなせよより
我々の言ふは物と潤してをれらの地極く
なれぬよ乱詞とあつてみせの歌とはく
鑑すればはらにむも〇〇〇〇と我とん
存ゆふぬとぬとぬのあふとわく
柳のさる言のら次中あり

〇註曰淮南王始製豆腐出千酒陽雜俎△本朝ノ諺ニ
隠之豆腐トモ隠之餅トモ類ノ名同多シ夏ニ和漢ノ通稱
ト知キナリ ○古今はつるものむ柳のさるとわくむの
人の神のさるとる ▲青丹吉トハ歌ニ誦テ次第良ノ枕詞

然に田手トハ季良ノ季ニ黄衣ノ法師ノ棒ニ登テ躍ル
時ノ形容トフ △狂言辯語ノ戯モ讀佛來ノ縁ト云ルハ
礼讃ノ詞ナリ △孟子君子遠庖厨△論語割雞用
牛ノ刀搯スニ此ニ向ハ料理場ノ古語ラ假テ例々集古ト見
ヘキナリ ○古今序秋のゆの秋田川ノ流ルル
ハ帝のは白と錦とんのみ △国語篇第章既成撮其
大意ヲ以テ亂辭樂記古賦亂曰比自來也註
亂理也總理一賦之終云
空豆腐ハ仙洞ノ秘ナリ空豆汁ヲ以テ終日ニ煮沸テ卵醬油
ニ〇傳アリトソノ膳トハ豆腐ヲ山明シテ傳首自ニ卵ヲ加テ空雪ハ
茗ノ類ヲ摺テ銅枚子ニスルニ豆腐ノ煮ユル上ニテ温ハ然ハラ
相圖ニ掛テ出サリ搦スニ此ニ名ハ膳ノ滑ニ歌人ヲ寄スルナリ

供雪ニ新古ノ論アリテ春氏云ク冬氏云ルニ季ノ成ラズ元
 ナリ又ニ筆白ノ絶妙ト稱スレシ神園トハ葛田毛ニ摺袖ト
 高ニテラ散シテ申ナトラスラ其各トセリト田ホ味噌ヲ附
 ル時多ナリ青丹ノ下ニ註アリ南禅寺ハ救豆腐ナリ葛田
 ニ女子ヲ加フ或ハ天山氏云リハ必ニ余トハ四角ニ切テ練葛上
 ニ花鯉ヲ置直ナリ治部トハ燒立ノ豆腐ヲ生將油ニ入ル直
 然ラハ銷ノ和訓ヲ用ケト治部ヲ宍人ノ名ニ寄セテ万葉ノ
 假名ヲ用スル又ニ富言ノ絶妙ト稱スレシ温飽トハ美木ニ切テ
 煎將ニ鴨頭ヲ加フ多クハ郎大根ニ切テ添ナリハ五トハ領
 ノ料理ナリ將油一盃ニ水八盃入テ酒壺ニ加減アリ雪下トハ
 湯漬ノ豆腐ニ胡ハ味噌ヲ掛ケ椀ノ底ニ成ヌリテ其上ニ飯ヲ
 一枚子ヲ將直ト出スナリ先ハ飯食限リト松山トハ燒豆腐ニ寄

油答ト口ヲ掛ル直ナリ梅スニ歸倉ト越後一對ノ兼治
 我國ノ産カト云元作者ニ頌ノ節ト云レシ鰻崩ト摺物ノ類
 葛ト著者頌トニ以テ練葛ニ山々美ヲ置直ナリ鶴靴モ摺物
 ナリ松葉牛房ニ麻宜ヲ交セテ榧ノ油ニ揚ルハ糖味噌
 ハ白煮ノ豆腐ナリ子細ニ及ハス寺齋トハ俳諧ノ名ニ油揚
 ラ串ニ刺シテ胡椒將油ノ附燒ナリ海鯉川鯉ノ郷音ト
 或ハ細ク切リ摺テカラ生將油ニ入ル直ナリ散ラヌ魚造作ヲ
 用トセリ奴豆腐ハ天下ノ通稱ニテ今ノ註スレ及ハス梅スレニ
 此奴ハ一篇ノ結語ナカラ又ニ寄セ武ニ寄セテ名整ノ産大
 ナル甚野ヲ俳諧ノ談矣ト知レシ況ヤ此則ハ十七種ノ名ト
 總テ料理ノ異名ヲ奉スレ結段ノ奴ニ至リテ豆腐ノ二
 字ヲ顯セル也等ヲ又ノ一躰ニ法ニ懸錘ノ絶妙ト稱スレシ

○海はけ孤は他話のまじ格も一とされく抄のよ
ふと奉るに短語あり也語あれはゆるく言
對とまらふ也也とらと空のこまの起りて或豆腐
のこまの起いん常山の池の傷ありといふ
たして又七の歌ともく亂辭とあきらまらるる
家ノ賦類とらなりて和漢ノ自在とわたり
とつて一作を前集と姓をあり鑑をたは
ふ兵をありとせ

有磯賦 昇序

源源支

大徳宿称家持のこの國の守に

はつれけ浦よほろよとていぬ越の風を採
て詠音のおもくれもして万葉集もあつた
也それより發人の書客してたそとてい
はくり代この撰集も載とる也おほく賦と越
の名蹤あり西にお侍傳多しといふ東に松崎湖
こつていかりておほい湖のい草とあまといふ浦
の意物もあつたまにそれの年月とあつて一
篇の賦もあつたものか
まはつた一か尋集もあつたといふもわかむと相
まはつた一か尋集もあつたといふもわかむと相

久しく朝日歌を詠ふと海よりうるときよとむしきよ
 のふら白鳳年中ふりけてつとに美師美場あり
 ちくりねみすく水祓灯をのり静まりて年越の
 おの園とてらり心重密の水はゆりて依のふれ
 喉といやもふらたのあまのま祥まの洞家よ四海の
 ちとちりりいむら七きと伽藍とて園美ちのいむら
 ちの氏の建てるて中良ふに燈の光とほくふいつれ
 禪泉の名區なり神社を射水布勢か前代磯部
 和泉の天満宮におよの行とせりてちちりるとせよ
 ちりりい田の虚空を枯木よあつたれく神柱の名

しばしけうも訪海野のね又社宮の標まのちのち
 歌人の跡とほく入江のかりとと隠るのねとつれ
 保らせ取入船の帆とがそく呉東楚南の人とたうち
 かにに明舟の津とまきとと越し凡士の屋と糸とへ
 氷の座氷見枇杷イシナシ鮎イナシ鼻曲ハナマカのふとふら
 ちりりいりてあくゆね観海宮和布うつを
 貝とまきぬとふたうく刺るるるるるるるるるる
 山里のおまふら葛葉クワハ論田真マコト早借道ハヤカ指崎ササキ繩
 女良メノラ庵下アツカの踐ツミちのふらとて終ハヤシま王の厨とて
 長坂の批味正の柿山のおまきと濱のうらうらいも磯と

山人不詳

四十二

は須の古をうて姓と原帯とつては原の美利神
より子と孫なり一原支の但能名ありはは
了然有るもいそわに金きとてしる。しつねと
ふ世との操まらちりては

幻佳庵賦

以四難坊

五十年やちるもく男と女を極の老はありありで
端牛のからとく一ふん黄毛のいれとほはあれ
り来あるもいそわに金きとてしる。しつねと
おたふるもいそわに金きとてしる。しつねと

と面とく。は須の古をうて姓と原帯とつては原の美利神
より子と孫なり一原支の但能名ありはは
了然有るもいそわに金きとてしる。しつねと
ふ世との操まらちりては
くろくわ海のある後よもいそわとつてしる。しつねと
のいそわに金きとてしる。しつねと
此一原の危とつてしる。しつねと
そのいと國分とつてしる。しつねと
六根とつてしる。しつねと

文林卷一

四十四

任持一三の言と勇力士若沼氏曲水の伝文から
 人のけせといひ一跡くやわるといへばはくし北
 いくよりありて樓と^{てしか}なる海一のちまへておさる滅し
 知号人迷倒七比るましく幻の一子に解てすし若沼
 逆のこしつらうとさるふよるまへておさる
 一守くも人あまき程よ命をいひつらふとよに
 あつて岩向らのまうり一まきまうり南葉まうり岸
 かつおら一北風をうた海といひて清一たつて
 卯月のほちまねるはく一雲ゆる山あ一ねらつて
 時をうとくしつらうとさるふよるまへておさる

のほくもそ一。かうこころ我といひつらふとよに
 ひらりらぬくしをらよまをいひて。まは若南のあが
 一とらよと又湖に泳まうに疑一おやは枝のらひら
 のこねり幸時のねと若屋まうり雁石の峰あある
 よかつやぶお回のはりる命をいひつらふとよに
 又とらよと一とらよと一あ一の傳はつらふとよに
 のちまをいひつらうとさるふよるまへておさる
 らくわら嶽子まうり岸はるまうり一とらよと一
 心一まきまうり岸はるまうり一とらよと一
 行くく懸まうり岸はるまうり一とらよと一

文抄巻一

四十六

柳はくりに暮葉の如産とふふしてそと猿の腰かけと云く
 唐三ゆね陣衣の海葉草の飲糸も市河のちる海草
 く玉る人々の薄の脊の位のもまと捨てくさむ
 へくそ虚花上眼とひくそ味くそ腰頰よさむと
 桐て産もそよふくそやちり時上新と云く
 清水とむもよ小蓮おちるの葉のひくそと産く
 ごとくお葉と云くそ一がのそあつく軽おに
 任まかかんはしすくといふくきくそと云くおおきく
 あしお仰一向と産くそつらぬおかからよくそよあ
 くれくそあつるのほろふくさうの傍ら海ののちり

水産ひとありとて額とくくそわさつらと
 ぎくく幻住庵のこ子とかられたそ重きつらと各
 と書けつねに人の記念ともあはれ世ふおくいん縁
 手書といはゆるるうつおきくつらつらも本家の
 梅筆之越のそ女美くくり枝の上お柱よかまけり産と
 六つよお林下の重人あし入まけりつらつらお稲く
 あしそ名の中あ相よかあそあそあそあそあそあそ
 さきくつらおとされくそあそあそあそあそあそあそ
 顔とくもあひ圖西一對つらつらそそおとつらつらく
 くれくそあつるの南産と云くそ山際つらつらあつる

こも阿も病方や人こもやとく人こも
うり何もやばとも終とま倍とまはとまこいひまき
時よりとこさゆとまきるより終りてまこくは海の
はらとこもさるれと終りけり物にほふれとくは能
可とと触のこ方して功じあぐと鬼にれ眉と
まもて秋もまにるりかしく以系物ま方の事とに
又ましくまのほりぬのまもとやとくはと
とくまてまてまて

○註目宗鑑法師八山崎に住テ門前ハクモ旅ハクモ屋に往テ旅人
ノ如ク朝夕ヲ食テトフ寶賢寺ノ下ニ而跡アリ▲能因法師

八百河ノ秀歌アリ奉止及ハス○祖云羽ノ奥細道ハクモか
と名はる處よぬと袂と△諸物みらのくのたのほ
うりよまももあちちり存いさよとまてかてかてか
善知厚とわかたり △知覺ト迷倒ハ佛書ニ速悟ニ下リ
△生死事大無常迅速人ノ字ハ叢林ニ巡照ノ誡ナリ巡照
トハ夜巡ナリ○西行奇夜ノりしとけり今とまて○祖云
燈火うまていとさひくせよかんこも ●杜詩ニ吳楚
東南割乾坤日夜浮ハクモ按スルニ廿二句ハ猿其集ノ彼記ニ
鬼ハクモ豆ハ楚也南ノとく身ハ津波の處ノとあり
然ルヲ遺稿夜話ニ假名直名各ノ配ヲ評テトテ故云羽ノ夜
話ヲ奉テ我輩ヲ幻住庵記ニ云鬼ハ楚ト書續ケタルハ
一生ノ不名事ナリ云鬼ハ吳楚ト云く身ハ津波ト云テ何ナ

手不波ヲ失ケテ返スルモ悔ミ玉リ也故ニ又賦モ是ヲ才四
 ノケ條ト成セリ也等ニ文言ノ返ルト返ラサルヲ和漢ノ差別
 ヲ知シテソ誠ニ巧キハ遺文ノ撰論ナリ △是取山ト
 黒津里ハ記ト賦トヨ評アリ彼記ニ前ニ景物ヲ書續レキ
 則チ其ノ一ハ本ナリ也存クモ其ノ小田ノ予當りナリ
 トシテ後ニ各所ヲ續ケテトトすの里ハハトシテ其ノ
 アリトあり也等ニ花實ノ二用ヲ知シテ例遺稿ニ後話
 アリ其外一篇ノ花ト云也彼記ト賦ト見合スレ
 ▲山谷詩集ニ徐克海棠葉上玉菊主簿峯庵ニ二隱者有之
 其註ニ妻ニ奉シ及ス ○ありきとくといふもの
 名はれぬことどもありあはれのり ▲高直山ハ和漢
 ニ在リ僧正ハ加平甲斐カ巖子ナリト額ハ東書ニナリ

△莊子ニ因兩向影ニ註ニ影遣之於庫者
 ○浮云祖云幻住庵の文々之通ありて姑の通を
 存掃舎ノあり中の一通とけ賦あり終の一通を
 猿蓑第ニ出して世とれる幻住庵記ありはれん
 世々ノ一通の子細と姑のと文章の所用此より
 中のと文章の花葉とそろく終めると文章此
 を文とすそ又通ノと思の親切とすそ又此を
 減レ世賦のむやあるは記をわさるうけたりはに
 先とけすはとれる百世の所るとあるはれんや
 ありに一通のゆまむの篇をうて記と賦
 とめて説あり猿蓑ノむさる一通と存すなり今
 記射して幻住庵のむさとあり今の一通行を

賦射して眼方の以畢と演をくく幻住のつこ子此
親おとほくもり例の詛傳をきやく獅子庵の遺稿
よけ夜話あり或とて行の五秘の中へぬる遺文
と評するもけいし我々の文集に松崎野のこまきと
文章の中はたすもよく戦場文も銀河序も重碑
の結段をきくつれも奥細道よりそと尾と野りて
裁入されたりなりと書のはしめて記射の辨とほく
まてしとありたりやと畢のむさうをたれくの
又文章と裁入れたるもよりの物とある一先覺と
あるもはありとを減らすくの真の廢り人の選
付事よれりといふ儒書併托の論ちりともやこに
畢鉢羅の因ととあると一但こ通の標号し始

のを松野子とあり中のを以羅坊とありて後のは
甚蕉庵とあり文も曲意地のご別ちりとも松野
も以羅子と例の姓名ありてなりなり派那集と祖考
の遺詠の混新を今も世に傳ふとさうあるか
あり一海に難波遺林と文章のなぬと武陵と花を
我師の松野とすもなぬと道の大任とある一
松野とくはるる一とて遺行の評ちりなり

文操巻く一終

